

# 風景計画研究

Landscape Planning Research

風景計画研究・事例報告会梗概集

2021度 日本造園学会全国大会 ミニフォーラム

2021年5月23日

公益社団法人日本造園学会  
風景計画研究推進委員会

Vol.6

---

---

2021年度日本造園学会 全国大会ミニフォーラム

風景計画研究・事例報告会梗概集

## 風景計画研究 第6号

---

開催日時：2021年5月23日(日)

開催場所：オンラインミーティング

---

■ 風景計画研究推進委員会趣旨説明	2
■ 研究・事例報告	
村上修一：風景の新しい見方を探る－実践例の紹介	4
上原三知：里山保全型のグリーンインフラの共創と共有－長野県伊那市上牧における民有林のフットパス化－	6
武田重昭：情景と光景－コロナ禍で考える風景の価値	8
高山範理：新たな社会的パラダイムにおける風景の止揚と再獲得	10

# 風景計画研究推進委員会 趣旨説明

風景計画研究推進委員会は、公益社団法人日本造園学会が以下の目的のために設置したものである。

風景計画・造園計画等広く計画系の研究に従事する研究の交流を図るとともに、計画系研究の体系化を図ることを目的としている。

「風景」は、実証科学的には取扱いの難しい概念であるが、自然環境だけでなく歴史や文化の価値を伴った概念と考えられる。近年、情報電子機器の発達やインターネットの普及と、頻発する自然災害に伴い、従来とは異なる風景・景観が立ち現れているといえる。

以上を踏まえ、ここで改めて風景・景観の保全・創出のための計画手法や方法論を体系的に整理していく。具体的には、景観概念の整理、景観分析の手法、景観計画案の作成、計画実施に大分し、整理を行うものとする。

## 2021 年度全国大会ミニフォーラムの趣旨

コロナ禍において、生活、人と人のコミュニケーションは大きく変わり、その結果、私達を取り巻く風景は大きく変化した。2020 年度全国大会企画フォーラム「風景の変化の兆し 身近な空間とそこへの関わり方の未来」では、With コロナで目の前にある空間とそこへの人々の関わり方の変化の兆し、それらにより新たに生成されつつある風景を捉えた、まなざしから、共時・通時的に多くの風景・風景体験が存在し、その蓄積された記録を踏まえた学術研究が多く報告された。さらに、風景計画分野で「何を（目的）」とともに「どのように（プロセス）」実現するかを重んじた計画に関わる行為を続けることの重要性が議論された。そこで、2021 年度の企画フォーラムでは、変化に適応する風景計画の方法論を構築するため、人と空間及び人と人の新たな関係性の構築、あるいは将来の多様な体験や価値付けの共有を可能にする風景について議論を深める。

## 2021年・2022年度 風景計画研究推進委員会

委員長	伊藤 弘	筑波大学大学院人間総合科学研究科
幹事	町田 怜子	東京農業大学地域環境科学部
委員	松島 肇	北海道大学大学院農学研究院
	上田 裕文	北海道大学観光学高等研究センター
	温井 亨	東北公益文科大学
	入江 彰昭	東京農業大学地域環境科学部
	小島 周作	東京農業大学大学院 農学研究科
	小林 昭裕	専修大学経済学部
	高山 範理	(国研) 森林研究・整備機構 森林総合研究所
	田中 伸彦	東海大学観光学部
	高瀬 唯	茨城大学農学部
	寺田 徹	東京大学大学院新領域創成科学研究科
	古谷 勝則	千葉大学大学院園芸学研究院
	松井 孝子	株式会社プレック研究所
	山本 清龍	東京大学大学院農学生命科学研究科
	上原 三知	信州大学学術研究院農学系
	水内 佑輔	東京大学大学院農学生命科学研究科
	村上 修一	滋賀県立大学環境科学部
	武田 重昭	大阪府立大学大学院生命環境科学研究科
	渡邊 貴史	長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科

公益社団法人 日本造園学会

風景計画 研究推進委員会

## 風景の新しい見方を探る—実践例の紹介

○村上 修一\*

### 1. はじめに

今年度、風景計画研究推進委員会では、人と空間及び人と人の新たな関係性の構築、あるいは将来の多様な体験や価値付けの共有を可能にする風景について、議論を深めることとなった。あいにく本稿では議論を深めることにならないかもしれない。せめて多様な体験や価値付けの方法論構築の糸口になればと考へ、投稿をさせて頂くこととなった。

筆者は、教育研究の場において、風景の新しい見方を学生達とともに探っている。卒業研究も含めると3桁に迫る件数の研究に関わってきた中で、無垢な学生達により見出された新しい見方に刺激を受けてきた。ただ残念なことに、これはひとえに筆者の指導力不足のせいだが、その多くが公表されないままである。いずれそれらについて総括すべきと社会的責務を痛感しているが、本稿では、学術雑誌等に掲載された公表済みのものに限り、研究で探り出された風景の新しい見方を紹介し、議論の糸口を提供させて頂くということでお許し願いたい。

### 2. 学生達により見出された風景の新しい見方

#### 1) 工場景観に見る庭石組の構図

西川他(2018)は、庭石組の構成との共通点を工場景観に認めたり。具体的には、四日市コンビナートの工場景観を構成する煙突や鉄塔といった縦長の要素と、パイプ



図一1. 四日市コンビナートの工場景観 (撮影：筆者)

や建屋といった横長の要素との組み合わせや位置関係を、近江の作庭家、鈍穴の著した絵図『庭造図絵秘伝』の三尊石、蓮華石、盤石の組み合わせや位置関係と定量的に比較した。その分析結果にもとづき、縦長の三尊石が横長の蓮華石や盤石に下支えされるという構図との類似性が、工場景観の中にも見出せることを指摘し、縦長の要素と横長の要素との対比による動的平衡を、四日市コンビナートの工場景観の魅力としている。

工場景観については夜景を中心に評価が定着している感がある。四日市コンビナートについても観光名所となっている<sup>2)</sup>。また、工場景観を紹介する図書や写真集の刊行例も複数ある<sup>3)</sup>。さらに、学術研究においても、少し範疇は広がるが、人工構造物のつくり出す産業景観がテクノスケープと定義され、「景観異化」という美学概念から解釈が行われ、単純反復が生むミニマルアートとの類似性等が指摘されている<sup>4)</sup>。しかし、庭石組に通じる審美性を指摘したのは、本研究が初例と考えられる。

#### 2) 内湖干拓地にて思うフランス式庭園の軸線景観

西村他(2019)は、フランスのヴェルサイユ宮殿庭園やヴォー・ル・ヴィコント庭園のような壮大な軸線景観を、内湖干拓地の外周堤防上の眺望景観に認めた<sup>5)</sup>。内湖とは琵琶湖の沿岸に形成された浅い水深の潟湖であるが、食糧増産の必要性を背景に、内湖の外周に堤防が築かれ、干陸化された湖底に道路、水路、圃場が格子状に配置され、干拓地化が進んだ。このようにしてできた内湖干拓地は、いわば底面に格子の模様が刻まれた大きなフライパンのような地形である。このような地形に着目した西村らは、軸線を中心とする景観が外周の堤防上より眺望されるのではないかと予想し、近江八幡市と東近江市に立地する大中の湖(だいなかのこ)干拓地を対象に検証を行った。

干拓地内の道路および排水路と外周の堤防との交点79ヶ所に視点を設定し、干拓地の道路、水路、圃場などの平面構成と周囲の地理的状況、干拓地や周囲の地形に関わる立体構成、堤防上から眺望される景観の構成について、文献資料や地図の調査および現地踏査の結果を分析し、軸線を中心とする景観の特徴を考察した。その結果、道路や排水路の軸線を中心に、その両側に圃場が並ぶという景観の特徴が明らかとなった。一方、そのような軸線と線対称の景観の特徴は、建物やその他の要素によって弱められることもわかった。さらに、フランス式庭園の既往研究<sup>6,7)</sup>で指摘された錯視効果を生み出す勾配変化が、この干拓地にも認められたという。

ほ場整備の進んだ農地における道路や水路といった線形要素を、景観構成要素として積極的に評価する試みは

\*滋賀県立大学 環境科学部 環境建築デザイン学科



図一 2. 大中の湖干拓地の軸線景観（撮影：筆者）

既にある<sup>8)</sup>。しかし、フランス式庭園に通じる審美性を指摘したのは、本研究が初例と考えられる。

### 3) 空家の植物に感じる「さび」と「彼方」

脇阪他（2017）は、空家の敷地内で植物が繁茂する様子に、あるものをあるがままに活かす景観の作法による沿道景観演出の可能性を認めた<sup>9)</sup>。具体的には、東近江市全域の主要道路沿いで107軒の空家を特定して敷地内の植物を詳細に記録し、植物構成の分類や、隣地境界付近の断面の分析を行った。その結果、全戸の植物が街路より視認可能で、大半は量感のある木本であることから、街路景観に一定の緑量を提供しているとした。

指摘は緑量の提供で終わらない。高木や中木が家屋を覆い隠す状況、木本、草本、ツル植物が混然一体となっている状況、草本が非舗装面を覆う状況、ツル植物が家屋からみつく状況を観察した結果にもとづき、人の手入れから一定の時間が経過した現れであり、古びたものに感じられる落ち着いた趣き、すなわち「さび」<sup>10)</sup>のある景観であるとした。さらに、空家と隣地との間の境界付近の断面分析の結果より、空家の植物が隣接する住宅の庭の背景となり得ること、隣家から空家の植物に対して視線は連続するものの、動線は不連続（隣家に立ち入ることはできない）であることから、此方（隣家の敷地内）からは到達することのできない彼方（空家の植物）を眺める、すなわち神仙思想を背景とする池泉や枯山水の庭<sup>11)</sup>に共通する鑑賞形式の可能性を指摘した。

私有地として立ち入ることの許されない空家の敷地が、地域の庭として共用される事例やしくみの存在は、既に指摘されている<sup>12)</sup>。しかし、茶庭、池泉の庭、枯山水の庭に共通する鑑賞形式の可能性を指摘したのは、本研究が初例と考えられる。

### 3. 実践例にみる風景の多様な体験や価値付けの糸口

以上の3例には、以下のような共通点がある。いずれも、無垢な感性による緻密な観察を通して、庭の審美性

とは無関係と思える景観に、新たな価値付けの手がかりとなる類似性を探り当てている。そして、これらの発見は、庭の審美性に関する諸先輩方の研究成果、知見の蓄積によるところが大きい。造園分野の王道とも言える庭の審美性に関する知見と、一見無関係に思える景観との結びつけの可能性は、数多くあるとみる。人工知能で大量の組み合わせを試行し、続々と新たな景観価値を生み出す時代が、すぐそこに来ているのかもしれない。

### 補注及び引用文献

- 1) 西川夏生, 村上修一 (2018) 日本庭園の石組意匠に通じる工場景観の審美性—四日市コンビナートと庭造図絵秘伝の比較—: 都市計画報告集17: 26-29
- 2) 四日市観光協会: 四日市コンビナート夜景マップ: <https://kanko-yokkaichi.com/sys/wp-content/uploads/2020/03/327e6e854d4a74571543bd831b4d0297.pdf>: 日本語: 2021年4月22日閲覧
- 3) 例えば, 大山顕 著, 石井哲 写真 (2007) 工場萌え: 東京書籍, 小林哲朗 写真 (2014) 工場ディスカバリー-Z大型本: アスペクト, などがある。
- 4) 岡田昌彰 (2003) テクノスケープ 同化と異化の景観論: 鹿島出版会
- 5) 西村成貴, 村上修一, 轟慎一 (2019) 軸線の見通しから評価した大中の湖干拓地における景観構成の特徴: ランドスケープ研究82(5): 593-598
- 6) 平岡直樹 (2016) ヴォー・ル・ヴィコント庭園の立体構成と平面構成及び構成物による視覚効果の創出技術: ランドスケープ研究79(5): 397-402
- 7) 平岡直樹 (2018) ヴェルサイユ宮殿庭園の立体構成と平面構成及び構成物による視覚効果の創出技術: ランドスケープ研究81(5): 443-448
- 8) 曾和治好 (1998) 日常風景の復権 新たなる「風景への視線」: 『ベーシック・スタディ ランドスケープ・デザイン』昭和堂: 178-181
- 9) 脇阪樹里, 村上修一 (2017) 空家植物による街路景観の形成—東近江市の主要道路沿いを対象として—: 都市計画報告集16: 166-169
- 10) 柴田武, 酒井憲二, 倉持保男, 山田明雄編 (2005) 『新明解国語辞典第六版』三省堂: 579
- 11) 小野健吉, W.エドワーズ編 (2001) 『和英対照日本庭園用語辞典2001年版』奈良国立文化財研究所: 43
- 12) 寺田徹, 雨宮護, 細江まゆみ, 横張真, 浅見泰司 (2012) 暫定利用を前提とした緑地の管理・運営スキームに関する研究: ランドスケープ研究75(5): 651-654

里山保全型のグリーンインフラの共創と共有  
 -長野県伊那市上牧における民有林のフットパス化-  
 ○上原 三知\*

1. はじめに

長野県は日本国内でも特に自然地の割合が高く、都市からの移住先としての人気も高い県であるが、他地域と同様に、少子高齢化による農林家や若年層の減少が進んでいる。担い手がいない農林地では、住宅地や太陽光発電施設の建設のための開発も急速に進む(写真-1)。加えて、都市からの移住者や、若年層の農林地との接点はなく、面積的には緑地が豊富な環境に居住していても、その保全への関心は薄い。高齢の所有者や後継者には保全のインセンティブが乏しい民有林を、周辺の都市住民も利用できる地域のフットパス(線状の共有地)として再定義し、安易な土地改変を避け、経済、防災、環境の3つの多面的な機能を発揮するグリーンインフラとして再生を試みた事例を紹介する。



写真-1 太陽光パネルに置き換えられた段丘林

2. 民有林にフットパスを作った経緯

伊那谷の段丘林は、景観、生物多様性の保全、土砂災害防災という側面でも意義があるが、太陽光発電施設などへの転換も進んでいる(写真-1)。そこで、民有林である段丘林と住宅との境界のパブリック・フットパスとしての利用について、地域住民(所有者を含む)と同意を得た上で、長野県の松枯れ対策の事業とも連携し、旧道と新たなルートを一帯で整備した(図-1) 1)。地域との協働を通じて作りあげたフットパスは、里山保全団体、小学校、地域のイベントを通じて段階的に管理・改善できる新たな共有財産(グリーンインフラ)となった。

ランドスケープ研究(2016)にも、その林を所有する地権者以外の地区住民も含めて、特にその保全意識(Willingness to Pay)には、保全された森林の利用やイベントへの参加意

欲、居住地からの視認性、最も近い散策路入口までの距離が関連していることを報告してきた(表-1) 2)。

自然観察会以外にも、健康増進、小学校の体験学習など多様な関心をもつ住民が、年代や新旧の垣根を超えて交流する場となった。1年間の延べ利用者数は、里山管理参加者400名、里山利用者(観察会、炭焼き)100名、小学校と協働の環境学習500名の合計1000名にもおよぶ(表-2)。



図-1 設置された段丘林内のパブリック・フットパス

表-1 太陽光発電等の開発が想定される身近な段丘林に対する保全意識としてのWTPの推定モデル

	model 1	model 2	model 3
今後の参加意欲	0.636 ** (0.199)	0.636 ** (0.199)	0.661 ** (0.207)
居住年数	0.011 * (0.146)	0.012 * (0.153)	0.011 (0.143)
可視性	0.508 * (0.141)	0.475 (0.132)	
時間	-0.200 ** (-0.214)		-0.174 * (-0.187)
西部居住者か		-1.203 ** (-0.200)	
緑視率			0.005 (0.061)
切片	5.791 ***	5.036 ***	5.939 ***
AIC	668.830	670.010	672.560
N	183	183	183

\*\*=p<0.05 \*\*\*=p<0.001

偏回帰係数(標準化偏回帰係数)

従属変数はln(WTP)。一般化線形回帰分析の変数選択は減少法を用いて行った。AICは値が小さいほど式のあてはまりの良さを表す。

表-2 コロナ禍の影響がなかった2019年の活動実績

月	企画広報	環境整備			利活用			小学校協働森づくり		総合計
		森林整備	草刈り	花の郷	炭焼き	草	薪の会	観察会	研修・体験	
4	7			60			4			
5	7		100					64		
6	5	20						22	30	
7	5			60				8		
8	5		100						36	
9	5	4		60						
10	7									
11	8	36			10	4	16	66	82	
12	5	4			10	4	7	135		
1	5	3			10		5	10		
2	7									
3	10								74	
小計	76	67	200	180	30	8	32	287	222	1120
合計	76		447				88	509	222	1120
%	6.8		39.91				7.9	45.4		

### 3. コロナ禍におけるグリーンインフラとしての健康増進、ストレス軽減効果の担保

さらにコロナ禍に行ったアンケート調査から、新たな利用者（地区外も含む）も増加しており、利用者は非利用者に比べてストレスが少ないことが確認できた(図-2)。

このように、単に豊かな自然が地域に存在しているだけでなく、日常的な生活との接点をデザインすることで、多面的な機能と、長期的な効果を発揮させることが重要であると考えられる。また、海外では、今回の敷地でも計画があった太陽光パネルなどの再生可能エネルギー施設も、グリーンインフラに含むと定義されるケースがある<sup>3)</sup>。一般の人々からすれば、クリーンエネルギーを増やすために使用されていない農林地を開発することが何故に問題か？という疑問もあるだろう。実際に、近年では二次林や植林地、草原、農地など、里山の自然に該当する場所で太陽光発電施設建設が多いことが報告されている<sup>4)</sup>。本論では、そのような再生可能エネルギーへの転用に対し、土砂災害防止、生物多様性の保全、住宅からの眺望、あるいは伊那谷全体としての景観保全、健康増進やコロナ禍でもコミュニティが集えるオープンスペースとしての多面的な効用が同時に実現できるような仕組みづくりの事例として、話題提供させていただいた。

また上記のコロナ禍における行動変容とストレス変化量に関する日本の都市と田園の調査分析結果について、ストレスの増加量と、地域コミュニティや家族との関係性の豊かさが強く関連している可能性について報告を行っている<sup>5)</sup>ので、参考にしていただければ幸いです。

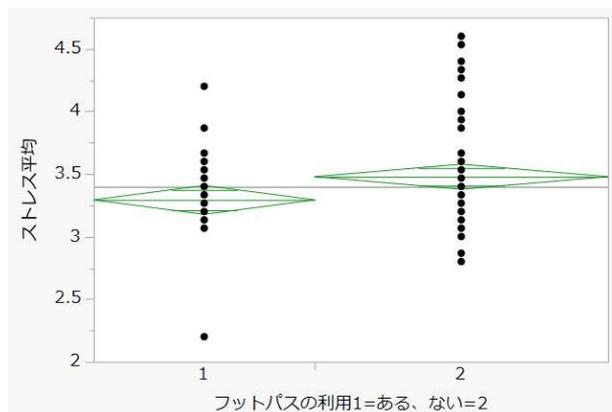


図-2 最初のコロナ自粛期における段丘林のフットパスの利用の有無とストレス増加量の関連性

1. 自粛前と比べて減った
2. 自粛前と比べてやや減った
3. 自粛前と変わらない
4. 自粛前と比べてやや増えた
5. 自粛前と比べて増えた

#### 補注及び引用文献

- 1) 上原三知(2017)森林:市民参加による景観保全と森林セラピーの両立,グリーンインフラ研究会(編集)日経コンストラクション,決定版! グリーンインフラ,日経BP社, 283-293
- 2) 橋本悟史, 藤井真, 上原三知 (2016). 開発が想定される斜面緑地の支払保全意志額とアクセス性および住宅からの可視性との関係. ランドスケープ研究, 79(5), 677-680.
- 3) Sustainable trade infrastructure in Africa: A key element for growth and prosperity?. International Centre for Trade and Sustainable Development. <https://www.ictsd.org/bridges-news/bridges-africa/news/sustainable-trade-infrastructure-in-africa-a-key-element-for-growth/>
- 4) Kim, J.Y., Koide, D., Ishihama, F., Kadoya, T. and Nishihira, J., (2021) Current site planning of medium to large solar power systems accelerates the loss of the remaining semi-natural and agricultural habitats. Science of The Total Environment, 779, p.146475.
- 5) Uehara, M., Fujii, M. and Kobayashi, K., (2021) A model of stress change under the first COVID-19 pandemic among the general public in Japanese major cities and rural areas. Sustainability, 13(3), 1207.

○武田重昭\*

## 1. はじめに 春の風景—2020年

2020年の春、未知のウイルスが世界中を不安の渦中に陥れた。日本でも4月7日に7都府県を対象に緊急事態宣言が行われ、4月16日には対象が全国に拡大された。春は変化の季節である。温帯に属し、気温や降水量の年変化が大きい日本は、四季による自然の移ろいが際立って美しく、そのリズムにあわせて歴史的・文化的な暮らしが営まれてきた。特に春は年度の変わり目でもあり、様々なあたらしい生命の息吹を感じられる季節である。それだけに、自粛生活を強いられた私たちの心へのダメージは、とても大きいものであった。日々の暮らしは一変し、特に都市では人々の交流というその本質的な魅力が損なわれた。これによって、人々の活動をその重要な構成要素とする都市の風景はいつもとは大きく違うものになった。

## 2. 光景と情景 風景の空間的価値と時間的価値

自宅で過ごす生活が長引くほど、人びとは身近な屋外空間に悦びを求めようになる。大人数での集合を避けながらも散歩や運動をはじめ、食事を楽しんだり、パソコンに向かったり、なかには青空のもとで麻雀を楽しむ人たちがまですが都市のあたらしい風景となった。これらは抑圧された生活のなかでの抑えきれない欲求を満たそうとする行動だが、世情のことを少し脇に置いて、目の前の風景だけを切り取ってみると、身近な空間がずいぶんとうまく使いこなされていると見ることもできる。そこにはこれまでのような人びとが集い、交流する集団の歓喜のような都市風景はないが、それでも、思い思いに過ごす人たちが互いの距離を保ちつつ離散的に集合<sup>1)</sup>する風景に、風景の価値を見出すことはできそうだ。離散とは疎外ではなく、むしろ離れたものとの間の意味を生み出す。身体的な関わりを持つことなく、しかし同じ時間と空間を共有することによって他者と連帯するという、あたらしいパブリックライフの風景が生まれている。

ビフォー・コロナの社会において、私たちが都市の風景に惹きつけられるのは、そこには多くの人々が集まることによる「にぎわい」が大きな要因となっていた。例えば大阪では、水都再生へのプロセスにおいて、一定のハード整備を先行させた後で、リニューアルされた中之島公園を中心

\*大阪府立大学大学院生命環境科学研究所



写真1 2020年5月の大阪・中之島公園の風景

に展開された「水都大阪2009」のイベントが象徴的であった。多くの市民が水辺に集い、様々なプログラムに歓喜し、都市への誇りを鼓舞しあった<sup>2)</sup>。このような光景が市民の手によって大阪の水辺に展開されたことは、大阪のまちが最も美しく輝いた瞬間であり、それはまさに、あたらしい水の都大阪を象徴するスペクタクルだった。都市には一期一会のドラマチックな場面や祭りやイベントといった集団で祝福を共有する風景が不可欠である。

このような光景は風景の持つ空間的価値を瞬時に顕在化させるものである。一方でそれは、日常的にいつも現れているものではない。むしろ非日常であるからこそ、その刹那の価値がより一層高まるのである。コロナ禍で現れたあたらしい生活の風景にも、このような光景の価値を見ることができる。しかし、それは一瞬の魅力として失われていくのか、あたらしい文化として根付いていくのかによって、都市風景の持つもう一方の価値である時間的価値が決まる。都市風景はそれを支える自然基盤、その上に築かれた土木・建築構造物、さらにはそこに生きる人々の姿そのものが重要な構成要素となって、その総体をかたちづけている。都市の風景は一朝一夕につくられるものではなく、長い年月をかけてそこに築かれてきた環境の一断面である。都市風景はあるひとつの状態に留まることはなく、人々の働きかけによって絶えずその姿を変え続けている。そこには人々と環境との相互作用からなる生きたシステムとしての生態系が成立している。これこそが都市が生き物であると言われる所以であり、都市への総合的なアプローチが求められる理由である。風景はその特徴を最もよく反映させている。それゆえに、風景の価値は私たち一人ひとりの生活行動によって大きく左右される。日常の営みの風景にこそ、時間的な価値が宿っているのだ。

鳴海は「単なる空間の実態だけではなく、空間のなかで生きている生活の仕組みが透けて見えている」<sup>3)</sup> 状況を情景と呼んでいる。情景には表層的な形態の美しさだけではなく、そこにある暮らしの魅力があらわれている。その

背景にはその暮らしが持っている時間の流れが透けている。新型コロナウイルスは世界中に大きな困難や苦痛をもたらしている一方で、あたらしい風景の価値もつくりだしている。この苦境を乗り越えた先に再び取り戻される日常が、いままでと何も変わらない、もしくはいままでよりもつまらない社会になるのでは惜しい。この状況下に生まれつつある身近な暮らしの変化を集めて、その可能性を広げ、望ましい方向に導くことができれば、この災禍をこれからの都市を考えるうえでの大きな転換点とすることができるはずである。それはまだわずかな変化かもしれないが、時間をかけて積み重なっていくことで、都市の風景はあたらしい顔を見せてくれる。いま、都市の風景を考えることに希望が持てるとすれば、それはすぐに答えの出ない都市風景の価値を生み出す可能性にはないだろうか。

### 3. コロナ禍における公園の捉えられ方

新型コロナウイルスの流行により、これまでとは異なる生活様式が求められる中で、都市のオープンスペースのなかでも公園には感染を予防しながら利用を促進するといった複雑なニーズへの対応が求められている。

全国紙の一つである朝日新聞を対象に、2020年1月から11月の記事のうち「公園」と「コロナ」の両方を含むものを抽出し、公園が社会的にどのように捉えられていたのかを見た。全国の感染者数が増えはじめた3月下旬から5月上旬の第1波と呼ばれる時期には、特に報道数も多くなり、公園の閉鎖などが相次いだことに対する悲しみや恐れといったネガティブな感情が目立ったが、一方で密を避けながら社会的に過ごせることに対する安心や喜びといったポジティブな感情もみられ、公園そのものの必要性や公園をもっと利用してほしいといった意見もみられた。

公園に対する感情や意見は、感染者数の増減やそれに対する社会的な対応の変化にあわせて刻々と変化している。当初は迷惑施設としてのネガティブな感情も多かったが、都市における唯一無二の自由空地としての意義をより切実に感じるような世論も確認でき、あたらしい生活様式

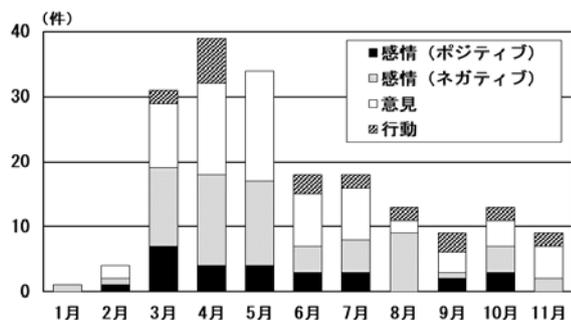


図1 新聞記事の内容の変化



写真2 2021年4月の大阪・靱公園の風景

に対応した都市空間の利用の作法や工夫がさらに展開されることが期待できる。

### 4. おわりに 再び春の風景—2021年

そしてまた季節は巡って春。今年の春もこれまでとは違う別れ方と出会い方を体験したが、それでも私たちはこの1年を通じて、あたらしい春を悦ぶ知恵を身に付けてきた。今年の春の公園の風景にはどこか、時間の蓄積を経た他者と過ごす共感の価値が内在されているように感じられる。

平野は恋愛という言葉「恋」と「愛」に分けて考え、「恋」とは、まだ結ばれていない二人が結ばれることを願う、刹那的な激しい感情である。それに対して、「愛」とは、既に結ばれた関係を長く継続させる感情である。」とし、「恋」と「愛」とは、言い換えるならば、「好きになること」と「好きであること」である。」<sup>4)</sup>と述べている。私たちは希望の光景によって都市に恋をし、意志ある情景によって都市を愛する。どちらの感情も都市に欠くことのできない風景のかけがえのない価値である。風景は都市を好きになるきっかけを与え、都市を好きであり続けることを可能にさせてくれる。

いつか戻ってくる日常で、私たちはやはり過去の慣性に捕われ、目の前のことに意識を集中しすぎてしまうだろう。そのとき目の前にある風景に、いまここにしかない価値と、いまここだけではない価値を見出していくための準備が必要だ。

#### 補注及び引用文献

- 1) 原広司「集落の教え100」1998年:彰国社
- 2) 橋爪伸也「水都」大阪物語—再生への歴史文化的考察」2011年:藤原書店
- 3) 鳴海邦碩「情景の都市」1991年:建築雑誌 (1313) 18-19:日本建築学会
- 4) 平野啓一郎「あなたという時の自分」2018年:考える輩:キノブックス

## 新たな社会的パラダイムにおける風景の止揚と再獲得

○高山 範理\*

### 1. はじめに

“風景とはその観る方法を知り、味わうことにより成し遂げられる”とフォン・コーニッシュリが指摘している。この指摘は「風景」とは物理的な環境の「眺め」であり、鑑賞者がその眺めに付与された意味や価値をくみ取ることで「獲得」されることを意味すると解釈できる。また「風景」は、古人が“人は現実のすべてが見えるわけではなく、多くの人は見たいと思う現実しか見ない”と言及した指摘に倣った現象でもある。すなわち、主体側の当該「風景」に対する知識や特別な感情の有無、またはそれらを「眺め」の解釈に活用される能力（リテラシー）が異なれば、たとえ同じ「眺め」を体験した人々の間でも「風景」に対する評価に差異が生じえる。風景研究者の間では、これまでにその差異自体が多くの研究アプローチを生成してきたことなどについてはよく知られたところだろう。一方、多様化・加速化していく時代において、前述の“「風景」の獲得のされよう（「風景」のあり様）”が、以前に増して複雑化しているように感じられる。これには私たち主体側に依拠した理由と、客体（環境）側に由来した理由がありそうだが、いずれにしても「風景」を研究する側は、そうした変化・動向に目配せしつつ、各自のなすべきをなし、着実に計画や実践に反映していく能力がこれまで以上に求められているように思われる。そこで、本稿ではそれらの変化・動向の一端に触れるとともに、現在のような状況下で、風景研究者がどのように対応し、計画への対応を担保していけるのか等について少し議論したい。

### 2. 技術の進展による新しい「風景」の誕生

昨今のITやスマートテクノロジー等の情報関連技術の発展には目覚ましいものがある。私たちの関心事である「風景」についても、日常的に接する（セミ）パブリックな空間や家庭等の屋内に自然風景を再現しようとする様々な試みが行われている。これには、「風景」のシンボリックな要因を抽出し、屋内等で再現しようとするもの（例：大阪富国生命ビル（写真1））、「風景」の持つポテンシャルを技術的に可能な範囲でそのまま再現しようとする試み（例：デジタル森林浴（写真2））などがある。それぞれ都市住民の一時的な休息の場として活用され、それぞれに高い評価を得ている。また、丸の内にある「大手町の森」のように、本来ではあり得な



写真1 大阪富国生命ビル内での風景体験



写真2 デジタル森林浴による風景体験



写真3 都市の森：「大手町の森」でくつろぐ人々  
い場所に、技術の力によって福音がもたらされることもある（写真3）。同施設は明治神宮の100年の森づくりから学んだ知見を技術として応用し、最新の土木技術と組み合わせることで成立したものであり、今では周辺の就業者らの憩いの場となっている。自然が都市部に出張してきたか、その逆かの違いはあるが、いずれの事例も本来あるべき場所に成立した「風景」ではないことから、個別の「風景」の評価は可能でも、相対的な評価や価値付けは難しいように思われる。

### 3. 風景体験の機会の喪失による「風景」の画一化

風景体験の機会の喪失については、これまでに指摘されることもあったが、それが実際にどのように「風景」の評価やその後の関わり方に影響を与えているのかについては断片的にしか報告されておらず、現在もその大勢に変化は無いように思われる。しかし、隣接する「自然体験」に関する成果などから、その重要性について類推することが可能になる。たとえば、曾我ら<sup>2)</sup>は世界中の自然体験に関する研究報告・データを集め、国内を含む多くの先進国で社会の「自然離れ」が急速に進んでいることを示している。こうした経験の消失は①私たちの健康

\*国立研究開発法人 森林研究・整備機構 森林総合研究所

や生活の質を害し、②また、自然に対する興味や関心、保全意識を大きく衰退させ、③さらに経験の消失は悪循環をもたらし、社会の自然離れが今後もより一層と進んでいく可能性があることを言及している。このことが、「風景」についても適用できるとするならば、風景体験の機会の喪失によって、今後「風景」に関心をあまり持たない層が増加する可能性がある。また、風景計画はある程度の公共性を基礎して行われることが多いことから、こういった将来的に生じる国民的变化が、風景計画の合理性に多大な影響をもたらすことも考えられる。

#### 4. コロナ禍等による「風景」へのニーズと期待の変化

国内では2020年1月から本格化した新型コロナウイルス感染症によって緑地全般の価値が見直されることになった。特に、第1回目の緊急事態宣言（2020年4月7日～5月6日）の前後には、多くの近隣の都市公園が行き場を失ったファミリー層などを中心に、これまで閑散としていた公園ですら賑わいをみせた。これには、子供たちを少しでも密にならない広い場所で遊ばせてあげたいという心性と、居心地の良い場所としての緑地の持つ機能が重なって集中的にニーズが高まったためだと思われる。この傾向は、より厳格なロックダウンが履行された海外においても同様であった。世界的なデータ分析から、ほとんどの国にパンデミック前後で緑地の訪問者が増加したことが報告されている。その理由としては、各種遊興施設等の閉鎖が一因<sup>3)</sup>とされてる一方、基本的にはソーシャルディスタンスを保ち、心身のレジリエンスを担保する場所として期待されていたことが報告されている<sup>4)</sup>。

また、このような身近な緑地・自然物とのふれ合いの折には「風景」のあり様にも変化が生じていたことが報告されている。特に都市部では窓から樹林の「風景」が見える家に住んでいた人々は、そうでない人々に比べ、「不安感」や「抑うつ感」が共に低かったことが報告されている<sup>5)</sup>。まだしばらくの間、コロナ禍が続くことを考えると、今回の体験によって「風景」を評価する私たちのリテラシーが多少なりとも変化した可能性を考慮し、計画の折に対象に応じて「風景」の機能のプライオリティに、これまでと異なった順位付けを考えるなどの配慮が必要になるだろう。

#### 5. 「風景」についての止揚とそれぞれの再獲得

今後、複雑化した「風景」のあり様を探っていくためには、まずはそれぞれのセクションにてさらに深い議論を積み重ねていく必要があるように思われる。しかしその後には、個別セクションにて議論した「風景」のあり様を統合し具体的な計画に反映していくためのオルタナ

ティブな議論の場（フォーラム）がこれまで以上に重要になるのではないかとと思われる。このプロセスは、経験知、科学的妥当性、歴史性、正当性、審美性や調和性、維持保全策などの「風景」を成立させる諸要因について、空間軸・時間軸に目配せしつつ、時機に応じた合理的な風景計画の組み立てを行うのに不可欠である。また、基盤的な知識は共有しながらも、視座の異なるアクター間の議論によって、「風景」を巡る議論に「止揚」が生じることで、より計画自体に磨きがかかるだろう。

一方で、上記のようなフォーラムにて議論を進めていくためには、個々人（や属しているセクション）の考え方や成果が、他者のそれらと相対化できるとお互いに理解が容易になる。各自の視座が可視化できればどのようなものであってもよいが、ここでは、その道具立てとして、かつて初期の環境心理学者であるアービン・ズービ<sup>6)</sup>が提唱した風景研究の3つのパラダイムと4つの評価区分を挙げておく。まずパラダイムは、工学を中心とした1)実学的パラダイム (Professional)、2)心理学を中心とした行動学的パラダイム (Behavioral)、3)人文地理学や文化地理学などを中心とした人文学的パラダイム (Humanistic) である。また評価区分は①エキスパート (Expert)、②精神物理 (Psychophysical)、③意味論 (Cognitive)、④体験論 (Experiential) に分かれる。

時々の時代的要請などによってポピュラーになる評価方法は異なるが、このような道具を意識することで議論のすれ違いを避け、濃縮した議論を積み重ねることが可能になる。また、風景研究者が自分たちの研究アプローチがどこに該当するのかについて常に自覚しておくことで、時代に沿って変化する「風景」の滋味について「再獲得」する際の有用なツールにもなるだろう。

#### 補注及び引用文献

- 1) フォン・コーニッシュ (著)、東洋恵 (訳) (1980)：風景の見方、中央公論社、180pp
- 2) Soga, M., Gaston, K. J. (2016) Extinction of experience: the loss of human-nature interactions", *Frontiers in Ecology and the Environment*, 14(2), 94-101.
- 3) Karl, S., Barthel, S., Colding, J., Macassa, G., Giusti, M. (2020). Urban nature as a source of resilience during social distancing amidst the coronavirus pandemic. *OSF preprints*.
- 4) Geng, D. C., Innes, J., Wu, W., Wang, G. (2021): Impacts of COVID-19 pandemic on urban park visitation: a global analysis, *Journal of forestry research*, 32(2), 553-567.
- 5) Dzhambov, A. M., Lercher, P., Browning, M. H., Stoyanov, D., Petrova, N., Novakov, S., Dimitrova, D. D. (2020): Does greenery experienced indoors and outdoors provide an escape and support mental health during the COVID-19 quarantine?. *Environmental Research*, 110420.
- 6) Zube, E. H. (1984): Themes in landscape assessment theory, *Landscape Journal*, 3, 104-110.

---

風景計画研究 第6号

発行日 2021年7月18日

発行 公益社団法人日本造園学会 風景計画研究推進委員会

伊藤 弘 町田 怜子 松島 肇 上田 裕文 温井 亨 入江 彰昭 小島 周作 小林 昭裕  
高山 範理 田中 伸彦 高瀬 唯 寺田 徹 古谷 勝則 松井 孝子 山本 清龍 上原 三知  
水内 佑輔 村上 修一 武田 重昭 渡邊 貴史

発行人 伊藤弘

編集 町田怜子 水内佑輔

---